

---

# トライアングラー from モンスターハンター

黒鬼風斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トライアングラー from モンスターハンター

### 【Nコード】

N7286M

### 【作者名】

・黒鬼風斗

### 【あらすじ】

重症の状態でポケ村の村長の家に運ばれたゼツイーラルファルケン。いつも3人で行動していた彼女だったが、この日、奇跡的に帰って来たのは彼女1人だけだった。そして、彼女の口から村長に告げられる衝撃の真実……。火山でのクエスト中に一体何があったのか。彼女はただ、目から大粒の涙を流す。

## 第一話 「女二人と男一人」 (前書き)

モンハン小説第二弾です。個人的に、自身のモンハン小説の中ではこの作品が一番気に入っております。ちよいとえっちい描写があったり、残酷な描写があったりするので、読まれる方はご注意ください。

あ、タイトルはご存知の方はご存知の、某人気アニメの主題歌から頂きました。内容も少々意識しながら… (笑)

## 第一話 「女二人と男一人」

生きているという現実が、こんなに辛い事だなんて知らなかった。

何故、私は生きているんだろう。

何故、生きなければならなかったんだろう。

何故、死んで楽になれなかったんだろう。

……心臓を鷲掴みにされているみたいに、胸が痛くて辛い。

辛くて辛くて、目を開いたばかりなのにあつという間に涙が溜まり、流れ落ちる。

口から微かに漏れる嗚咽が、静寂を静かに破る。

「泣いておるのか？」

聞き覚えのある、老人独特のしゃがれた声が頭の上からする。

口で呼吸をしながら、喉からやっとの事で声を絞り出す。

「……あの……二人、は……？」

「……」

老人　村長が低く、長く唸った。

暫く沈黙した後、村長が言う。

「一人はとうとう見つからなかった。そして、もう一人は……発見された時には既に……」

それは、悪夢なんかではなく、紛れもない事実。

村長に聞く間でもない事実。

自らの両目に焼き付いている事実。

それでも、私はそれがただの悪夢かも知れない、というほんの1%にも満たない確率の奇跡に、<sup>すが</sup>縋ってみたかった。

それが完全に否定された今、私の目からはまた、大粒の涙が零れ落ちるのを頬が感じ、嗚咽が大きくなるのを耳が聞いた。

「今は何も言わなくても良い。何も思い出さなくても良い。ただ、お前さんだけでも無事に生きて」

「私が……」

村長の言葉を遮り、私は震える声で、続けた。

「私が……殺しました」

「……何と言ったんじゃ、今」

「私が……あの二人を……」

嘘なんかいくらでも吐ける。

でも、それが事実である事に、違いはない。

それに、嘘を吐いて罪を逃れたいとは思わなかった。

「……殺し、ました」

空気が凍りつくのを、感じた。

トライアングラー 第一話

「女二人と男一人」

事件発生より27時間前

私は朝に弱い。

毎日毎日たつぷりと睡眠をとっている筈なのに、陽の光が部屋の窓に差し込み始めてから何時間も経過したって、干したてで良い香りのする布団は私の身体を決して放そうとはしない。いや、違った。私が布団を放そうとしないんだ。

眠くないけど眠い。だるくないけどだるい。……とにかく、ずっとずっとこのまま布団の中に潜っていたい。そんな自分と毎朝毎朝戦ってみるんだけど、やっぱり私は起きられず、結局“二人”の内のどちらかに起こされる羽目になる。もしくは、陽が暮れ始める頃にのそのそと起き上がるかだ。当然、前者の方が圧倒的に多い訳なんだけど。

ぐううううう。

お腹の虫が大きく鳴っても、誰かが聞いている訳じゃないから気にしない。お腹の減り具合から、もうそろそろお昼ご飯の時間だろう。お昼……お昼？

「しまった！」

私はガバツと勢い良く飛び起きると、ベッドから起き上がり慌てて上と下の水色の寝巻きを脱ぎ捨てて。脱ぎ捨てられた寝巻きは宙を舞い、ゆつくりとさっきまで私が寝ていたベッドの上にふわりと落ちた。その間に私は愛用の防具　淡いピンク色と肌触りが特徴的なくフルフルDシリーズ>を装着する前に、インナーを着ようと



手を伸ばす。

肌にぴったりと張り付くショートパンツを穿いたところで、私はインナーを着る事自体間違っている事に気付いた。……今日はオフの日であり、狩りに行かない以上、わざわざインナーを着る必要なんてない。

慌てているとろくな失敗をしないという事は百も承知なんだけど、“あの子”がお昼に私の家に来てご飯を作ってくれる約束がある以上、私はそれ相応の準備をして待っていないくちやならない。寝巻き姿で寝ているなんて以もつての外ほかだ！

穿いたばかりのショートパンツを再び脱ぎ、私は今度こそとばかりに、ベッドの隣に置いてある私服用ボックスを開き、適当に選んだズボンと上着を手に驚掴みにする。上着を一旦ベッドでくしゃくしゃに脱ぎっ放しになっている寝巻きの上に置き、私はズボンを穿こうと右足を上げ。

「おっはよー、もう起きて ……」

突然、ガチャリ、と家の扉が開けられ、扉から顔を覗かせた男の子 ユウと目が合う。

「あ」

「あ」

私とユウは同時に眩き、私はユウの視線に釣られるようにゆっくりと視線を自分の身体の下へと向けていく。

ズボンを穿こうと右足を上げたままの私は、正真正銘の、裸に近い下着姿。因みに上は……何も付けてない。

「……おおっ！」

「嫌あああああああつ!!!」

「ぶへあつ!?!」

反射的に自分の身体を隠すように屈み込む直前にユウに向けて投げ飛ばしたズボンは、不運にもユウの顔を裾の部分で軽く叩いただけで、そのまま勢い良く扉から外へと飛び出して行った。

私は馬鹿だ。慌てているとホントにろくな失敗をしない。

結局、私は下着姿のままユウに私が投げ飛ばしたズボンを取って来てもらうという羞恥に晒される事になった。

×××

「良い物見ちゃったな」

ユウは呟き、ニタニタと笑いながら持参した食材をキッチンのテーブルの上へと並べていく。たてがみマグロ、黄金米、幻獣チーズ、シモフリトマト……何処で仕入れて来たんだろうか、並べられる食材はどれも高価な物ばかりだった。

裸（に近い姿）を見られたからと言って、恥ずかしい事には違いはないけど、延々と引き摺る訳にはいかない。なんて頭では分かっているけど、ユウにそんな事を言われて自然に頬が紅潮するのを感じていた。……この“マセガキ”め。

そういえばユウの歳は先日19になったばかりだったわけ。19歳にもなると世間一般的にはもう子供ではなく、異性への興味とい

うのもそれなりにあるのが当然だろうから、“マセガキ”というのは不適切かもしれない。それでも私にとってはあの子はまだまだ子供だから、少なくとも私の中では“マセガキ”という表現が丁度良い。

ずっとずっと弟のように思っていたあの子を、今更見方を変える事なんて……きっと出来ない。

私はとりあえず、話題を転換させるべく切り出す。

「リルカは一緒じゃなかったの？」

少し間を置いて、ユウがプツと吹き出した。

「……昨日、何でドスゲネポスを狩りに砂漠まで行ったか覚えてないの？」

「何でって……あ」

「そゆこと。今は工房で“アレ”が出来上がるのを楽しみに待ってるよ」

『武器を強化したいんだけど、素材が足りないから付き合って』……そう言えば、リルカにそんな事を言われて無駄に暑い砂漠にまで行った記憶が確かにあった。ただ、それが昨日の事だったかは記憶が曖昧で、中途半端に目を覚ましたものだから記憶がまだ整理されていないみたいだ。昨日の出来事……だよねえ？

「まさかゼーラ姉、その歳でもうボケ」

「それ以上言ったら本気で怒るわよ？」

「ごめんちゃい」

女の子に対して歳の話は禁句であるという事にこの子は全く気付

いてない。特に27歳っていう微妙な歳である私にとっては……。

ゼーラ姉っていうのは私、ゼツイーラ「ルファルケンを呼ぶ時にユウとリルカが使う愛称で、初めて会った時からそう呼んでくれている。一人っ子だった私にとって、姉のように私を慕ってくれるのはとても嬉しかったりする。そんな事、照れ臭くて勿論二人には言えないけど。

椅子に座り、テーブルに転がっている真っ赤なシモフリトマトを指先でちょちよいと突きながら、食材に続いて同じくテーブルの上に置いてあった調味料の入ったボトルを眺めるユウの姿を見つめる。この子曰く料理は狩りと同じだそうで、その言葉通りに調味料を見ながらどんな料理に仕上げようか考えるその両目は、狩りの時のように鋭い。

ユウの作る料理はどれも凄く美味しい。自分やリルカの作るそれとは比べ物にならないくらいだ。どうしてそんなに美味しく作れるのか聞いた事もあるけど、『心を込めて作るから美味しいんだと思う』なんて少しフザけた事を言うものだから、おでこに一発“でこびん”をかました記憶がある。要するに秘密らしい。

「よし、決めた」

ユウが満足そうに私に向かってニツと笑ってみせる。どうやら頭の中にはもう料理の完成品が出来上がってるらしい。

「今日のメニューは？」

「そりゃモチロン、秘密」

「ケチい」

ユウの笑顔に、私も悪戯っぽく笑ってみせる。

……至福だ。ハンターとしてモンスターを相手に戦ったり走り回

ったりした後のオフの日は、こんな感じでのんびりするに限る。のんびりのんびりと羽根を伸ばし、次の狩りに備える。狩り行つてばかりの人生なんて、息が詰まりそうになるからね。

ユウが私に背を向けてお鍋の下の釜戸に火を点けようと屈み込む。手伝おうかと立ち上がったところで『座つていいよ』と言われたものだから、私は渋々と座り直し、ばけーっとキッチンを見回してみる。一人で暮らしている以上、料理をするのは嫌いじゃないから料理道具や食材なんかは一通り揃っていて、部屋の隅っこには野菜なんかを籠に入れて置いてあつたり壁に道具が掛けられてたりするけどどちらかと言うと狩りで家を長期間空ける事が多いからその機会は少なく、私のお腹は支給される不味い携帯食料で満たされる事が多い。栄養はあるらしいんだけど、携帯食料のあの不味さはどうにかならないかと、食べる度に思う。

いっその事、ユウが長期保存の効く携帯食料を作ってくれないかなあーなんて思うけど…アレどうやって作ってるんだろうなあ。やっぱり長期保存させようとするとしても味が落ちるのかなあ…。

「そうそう」

適当に部屋を見回してたところでユウの声が聞こえて、私はあの子の方へと視線を戻した。気付けばトントントンとリズム良く包丁で材料を切り刻んでいる音が聞こえる。

「思うんだけど、リルカの性格からして、新しくなった武器を早速使いたがるよね」

「あの子の性格を考えると……そうなんだろうなあ……。昨日の砂漠遠征が少し疲れたから、もう一日くらいゆっくりとしたいとこ

るだけど」

私はそう言いながら『う、うゝん』と背伸びする。

「多分、武器の強化が終わった後、適当な依頼を受けて来るんじゃないかな？ 早ければ今日の夜にでも出発しそうな」

「どうでもいいけど、馬車に揺られながら寝るのって結構疲れるのよね。朝や昼に出発できるような近場がいいなあ」

「言えてる。まあ、リルカが来ない事には何とも」

ボタン！ と扉が勢い良く開かれる音がユウの言葉を遮る。そしてズカズカと足音を立てながらキッチンの方へ躊躇いもなく歩いてくるものの正体は勿論、分かつてる。

「噂をすれば、だね」

「意外と早い参上ね」

ユウと私が一度目を合わせて笑う。

「じゃじゃじゃーん！ 遂に完成しました、通称“麻痺剣”！ <デスパライズ>うゝっ！！」

と叫びながらキッチンに入り、その“麻痺剣”を掲げてポーズを決めたのは間違いなくリルカだ。今日はオフの日の筈なのに、頭から爪先までの子自慢のくクックDシリーズ>を身に纏っているところを見ると、すぐにでも狩りに飛び出したいという願望を醸し出しているようだ。

とりあえず私は今すぐ狩りに行く事は反対だから というより準備やら何やらで半日は掛かるから無理。一息吐いてから冷静にツコミを入れる。

「どっちかって言うと、通称は“デスパラ”が一般的よね」  
「少なくとも麻痺毒の剣は色々あるから、<デスパライズ>だけに当て嵌まる通称じゃないと思うよ、リルカ」

その独特な色と刃の形をしている片手剣<デスパライズ>とその対となる盾は、どう見ても趣味の良いデザインとはお世辞にも言えない。それでも狩りの時には大いに活躍してくれる憎い奴だ……と、工房のおじさんが言ってたっけ。

「何よう、ちょっと口に出ちゃっただけじゃなあい……しくしくしく」

洪々と<デスパライズ>を腰に収めたリルカがめめそめそと手で目を擦って泣く フリをする。この子は何かあるといつも“コレ”だ。クエストを受注する際にも、ユウか私にちよつとでも意見が通らなかったらこんな風に嘘だとバレバレの嘘泣きをする。私達はそれに慣れているから『あゝはいはい』と受け流すんだけど、受付の女性や他のハンターから時々白い目で見られる事があるのが辛い。

まあ最も、白い目で見られるのは男の子であるユウだけなんだけど。

「それで？ 次は何処に行くの？」

いつの間にか身体を食材の方へと戻したユウが問いかける。瞬間、目を擦っていた手を腰に当てて二パツと笑顔を作る。

「さっすがユウ！ アタシの考えてる事がすぐ分かるんだねっ！」  
「そりゃま、伊達に19年間も付き合ってたないよ」

「やだもう！ アタシとユウはまだそんな関係じゃ  
「そーゆー意味じゃない」

ユウのツツコミにぷくぷくと口を膨らますリルカを見ながら、私  
はくすつと笑う。

リルカは今日も一人、賑やかだ。

T o b e n e x t . .



## 第二話 「狩られる者の情報を求めて」

事件発生より26時間前

「バァサルモス？ 誰だいそれ」

聞き慣れない単語をリルカの口から聞いたユウが、綺麗に空になったお皿を両手に2枚ずつ持って水洗い場へと持って行きながら言う。

バァサルモスじゃなくてバサルモス、俗に言う“岩竜”の事とリルカより先に答えたいところだったんだけど、生憎、黄金米とたてがみマグロのチャーハンの上にどろどろに溶けた幻獣チーズをかけたユウ特製“餡かけチャーハン”を口一杯に頬張っているから、私の口はさっきから喋る事よりもそれを喉の奥へと押し込む事を最優先としている。物を食べながら喋るなんて、そんなはしたない事は私には出来ない。

「変なところで切らないでよ。バサルモスよ、バ・サル・モ・ス！」

リルカはと言えば既に食事を終えて満足そうな表情を浮かべながら口元を布巾で拭いながら喋っている。拭い終えてから喋れば良いのに、布巾が口の真ん前にあるせいかちよつと大きな目のその声はやくぐもって聞こえた。

この子ももつとゆつくりと味わって食べれば良いのに。どうして私より多くの量を食べたのに、私より食べ終わるのが早いんだろうなあ……と横目で見ながら口を動かし続ける。もぐ、もぐ、もぐ。

「バサルモス……ごめん、何それ」

「勉強不足！ 名前くらいは知ってなさいよ！」

「そう言われても……ねえ？」

残念ながら今の私に同意を求められても答えられないよ。もぐ、もぐ、もぐ。

「ねえ、ゼーラ姉は知ってるよね？」

リルカが今度は私に向かって問い掛ける。相変わらず喋れないけど、代わりにこくと一度頷いてみせる。

「ほーら、知ってるって言ってるじゃない。知らないのはユウだけよ？」

「ん……そんなに自信たっぷりなリルカに質問。そのバサルモスって奴はどんなモンスター？ 何処に住んで、どれくらいの大きさで、どんな攻撃をしてくるのさ？」

「ええとそれは……」

「ついでにどんな武器が有効なの？ リルカのその麻痺毒はちゃんと効くの？ 罨は？ フルフルのように目がなかったりする？」

もぐもぐもぐ……ごくん。…うん、美味し。

喉越しの余韻に浸っている私の肩を突然リル力が掴んだ。少しだけ、本当に泣き出しそうな表情をしていた。

「うえええ〜ん、ゼーラ姉助けてえ！ ユウがアタシをいぢめるよおおっ！！」

誰がどう見ても苛めてはなかったと私は思う。確かにユウもリルカにムカツとして執拗にバサルモスの特徴を聞いたんだと思うけど、これから狩る対象のモンスターの事はハンターにとっては必ず知っておくべき事だ。それを知っているか知らないかでは、持っていく物の準備に大きな違いが出るし、生還確率にも大きな影響が出る。

「誰がいぢめたんだよ……ねえゼーラ姉？」

私としては正しいユウを肯定したいところだけど、そんな事をすればリルカはどんな行動に出るかは目に見えている。

う〜ん、ここで私の言うべき言葉は……。

「ねえゼーラ姉ってば！」

リルカが私の肩をゆさゆさと揺する。ユウが不安そうな目で私を見ている。

とりあえず、その前に。

ふう、と溜息を吐いてから、私は目の前に置いてある空けたばかりのお皿を見つめながら、ゆっくりと言つ。

「さっきの、おかわりまだあるかな？」

……言った後、暫く静寂が訪れた。

トライアングラー 第二話

「狩られる者の情報を求めて」

事件発生より24時間前

## 【バサルモス】

【竜盤目・獸脚亞目・重殼竜下目・鎧竜上科・グラビモスコ】

【グラビモスの幼体で、外皮が岩によく似ているのが特徴。この外皮は硬さも相当なもので、生半可な武器では傷つけることすら難しい。あまり活発に動こうとはせず、半ば地面に潜ったまま寝ていることが多いが、そのときの外観はまさに岩そのもので、注意深く観察しなければ、容易に発見できないと言われる。ひとたび攻撃を受けると揮発性の毒ガスを体表から噴射するほか、硬い外皮を利用した体当たりなどを行ってくる。なお、バサルモスの甲殻からは稀少な鉱石が採取できることもあり、ハンターから狙われることが多いようだ】

そこまで読んだところで、私は一度目を閉じて大きく深呼吸した。細かな字を見続けていると目が痛くなってくる。陽の光が差し込む窓があるとは言え、暗い部屋の中で読んでいるから尚更だ。昼食を終えた後、ちよつといざこざもあつたけど、ラティオ火山へ出発する馬車が発つ深夜になるまでは各自自由行動をする事になった。とは言つても、クエストを受注した後は大体いつもこんな感じ。剣士であるユウとリル力はまず得物を綺麗に研ぎ、防具を磨いている。私の方は村長の家にお邪魔して、バサルモスに関する資料を読み漁る事に没頭している。

「ふわあああああ……」

ついでに眠くなってきたので、一旦分厚い本を置いて欠伸をする。岩竜バサルモス、か。私も名前くらいの知識しかなく、戦った事

もなければ実物を見た事もない。そもそも私はユウとリルカの三人でしかクエストを受注した事がないし、それはあの子達も同じ事だから、私達三人の知識や経験はほぼ同じだと思う。……昼食の時のユウの発言は置いといて、ね。

目を指で擦った後、私はペンを持ってその本に書いてあった重要な事項を紙切れに写し始めると同時に、それらの情報を頭の中に叩き込む。狩るモンスターの情報を、そこへ向かう途中の馬車の中で淡々とあの子達に教えるのが私の趣味だったりする。その時の私に対する尊敬の眼差しはとても心地良い。

年長者たる者、これくらいの事はしないとね。……たまに喋り過ぎてうんざりされる事もあるけど。

「……よし、こんなものかな」

私はバサルモスの情報と、そして対策として必要そうな道具を紙に羅列し終わると同時に立ち上がり、さっきまで読んでいた分厚い本を本棚へと押し込んだ。改めて見るとさすが村長の家と言わばきか、色々な本が沢山並んでいる。多分、全部読破しようとするれば一月は悠に掛かるだろう。

だけど生憎、私には今のところそんな気はない。必要な時に、必要な本を読み、必要な情報だけ得られればそれでいい。

とりあえずここで得られる情報は全部得た……つもりだから、次に向かうのは……。

次の行動を適当に考えながら出入り口の取っ手に手を掛けようとしたその時、その扉が突然開く。光と共に現れたのは私よりもずっと背の低い老人　村長だ。

「おやゼツィーラ、もういいのかい？」

「ええ、もう十分勉強させて頂きましたので」

村長が『そうかそうか』と笑う。

「丁度良かったのう、もう少し籠っているようならば無理に追い出さねばならなんだ」

「……どういう意味です？」

「ちよつとばかり大事な話をするのじゃ、彼が誰にも聞かれたいと言っているのでな」

村長が家の中へと入ると同時に、村長の後ろからゆっくりと家に入ってくる人物。その姿は間違いなく。

「……ユウ」

「ゼーラ、姉？」

それは間違いなく、ユウだった。淡い水色の前髪を揺らしながら、その澄んだ瞳で私の目を見つめている。その目から、少しだけ、動揺しているように感じた。

何で、ユウが？ 村長に大事な話って、何？ 私には言えない事なの……？

私の気持ちを察してか、ユウがバツが悪そうに私から目を逸らす。そうされると余計、私の胸がちくんと痛んだ。

「スマンが、しばしワシとユウの二人きりにさせてくれぬか……？」

「分かり……ました」

何だか、納得いかない。

「ゴメン、ゼーラ姉」

『ゴメン』って、何よ。

私は下を向き、ユウとは目を合わせないように、あの子と擦れ違  
う形で村長の家を出た。やや、早足で。

……何だか、ちょっぴり。

ほんのちょっぴりだけ、ショックだった。

×  
×  
×

事件発生より23時間前



酒場はやっぱり、その名の通り酒臭い場所だ。

テーブルの上に置かれたばかりのビールをぐいぐいと喉の奥へと流し込みながら、改めて周りを見てみるけど、さすがに真昼間じゃ私と目の前のハンター以外だとほんの4、5人くらいしかない。夜の喧騒は何処へやらという感じで、かなり静かだ。いつもは忙しそうなのウェイトレスの女性も、暇そうに時々別のハンターと談笑している。

私がドン、と少し乱暴にグラスをテーブルへ置くと、目の前のハンター　ジンが呆れたような目で私を見ていた。

「酔うつもりがないなら呑まない方がいいぜ、ゼツィ」

失笑に近い笑みを浮かべられるのは、結構腹立たしい。

「うるさいなあ……。一杯だけ呑みたい気分だったのよ!」

「酒は酔うために呑むもんだ。お前が今やってる事は、酒に対しての冒涇だぜ?」

「うるさいって言ってるじゃない!」

私は再びグラスを持ち上げて、半分くらい残っている黄色い液体を一気に呑もうと口一杯に含んだところで　。

「お前、アレか?　あの“若いツバメ”にフラれたとか?」

「ぶふうっ!?!?」

……ジンの顔目掛けて思いつきり吹き出した。言い訳をすると、狙ったとかそんなじゃなくて、ジンが突然変な事を口走るのが悪いのであって。私目線の偏った統計だと私の非は1で、彼の非は9。うん、ジンが圧倒的に悪い。

暫く何とも言えない表情を浮かべていたジンが、苦笑する。

「……まあコレも、間接キスだと思えば悪くは」  
「悪いわよっ！！」

否定しながらズボンのポケットから取り出したハンカチで、ビールで濡れたジンの顔を拭く。彼が私服で助かった。防具を付けていたなら余計な難癖を付けられていたと思うし、何より拭かなければいけない面積が無駄に増えるところだった。

一通り拭き終わったところで、ハンカチをぐいっとジンに差し出し、後は自分で拭いてとばかりにアイコンタクトを送ると、ジンは渋々とそのハンカチを受け取る。

「何度も言うけど、私とユウはそんな仲じゃないの。リルカもずっと一緒なんだし」

「だが、お前はアイツらとばかり狩りに行って、俺達とはまだ一回も行った事ないだろ？ いい加減、子守は卒業して俺達と行こうぜ？」

「……まあ、またいつかね」  
「またいつかまたいつかって、一体いつだよ？」

ジンが溜息を吐く。だから、『またいつか』って言ってるのに。そんなの、またいつか、気が向いたらに決まってる。

「んもう、とにかく今日はそんな話を話しに来たんじゃないの！  
……ところで、大剣使いの相方は今日は一緒じゃないの？」

ジンにはしょっちゅう一緒にクエストを受注する相方がいて、私が彼を見ると大概その二人で呑んでいる事が多い。弓使いと大剣使い、愛用している武器の相性が良くて組んでいるって話は聞いた事

があるけど、まあそんな事は今はどうだっていい。

今日、私は二人に聞きたい事があって酒場まで足を運んだんだけど……まあいいか、ジンだけでも十分聞き出せる筈だし。

グラスに残っていた少量のビールを全部胃の中へ流し込んだ後、ジンが思い出したようにふっ、と笑う。

「ああ、アイツなら今は診療所さ」

「診療所？　彼が怪我したなんて珍しい」

私は驚いた。ジンの相方と言えばこのポケ村ではかなり有名なハンターで、たった一人で巨大なモンスターと対峙出来る程の実力者だと噂されている。いや、実際に飛竜にたった一人で戦いを挑み、その首を持ち帰った事があるらしい。そんな時に限って、私は別のクエストを受けている事が多く、そんな彼の姿は見た事はないんだけど。

「先日リオレウス退治に一人で行っていたんだが、色々とおつたらしいぜ？　その時にちよいと右腕の筋肉を潰しちまったそうだ。…

…あれは当分、大剣を振るえそうにないな」

「へえ……彼の話も聞きたかったところだけど、今日はあなただけで我慢するわ。その代わり、知ってる事を洗い浚い吐いてね」

「内容によるが、高く付くぜ？」

そう言っただけでジンが人差し指と親指の先と先をくっつけて、コインのマークを作っただけで見る。彼はいつもこうだ。面倒な事は、報酬がなければ一切引き受けない。それが例えちょっとした情報交換であっても。

と言っただけで私はその“ツケ”を大量に溜め込んでいるので、それが今更少し増えたところで気にもならない。正直、彼の方も正

確に帳簿を付けたりはしていないだろうし。

ジンの“コイン”を見て見ぬフリをし、私は敢えて無視して続けた。

「バサルモスの事、教えて欲しいの。そう、攻撃パターンとか詳しく」

T o b e n e x t . .

### 第三話 「キミは誰とキスをする」

事件発生より20時間前

「ごりっ、ごりっ、ごりっ。」

ユウが、私には相談できない事って何だろう。

「ごりっ、ごりっ、ごりっ。」

今までどんな相談だって受けて来たつもりだった。武器の事、防具の事、アイテムの事、クエストの事、リルカの事……。全部全部、親身になってその解決に向けて一緒に考えた。ユウとリルカと私。幼馴染である二人とは違って、私の付き合いは10年とちょっと短いかも知れないけど、それでもずっと互いを信頼している関係だと思っていた。

「ごりっ、ごりっ、ごりっ。」

……違う。何を考えているのよ、私。

ユウが相談したかった事は、私には相談出来ないような内容だっただけに違いない。

「ごりっ、ごりっ。」

でも、どんな内容なんだろう。

……。

私には出来ない相談って、もしかして、私の事で……？

「ごりっ。」

もしかしてユウが作った料理をいつもいつもつまみ食いしている事で？

クエストへ向かう馬車の中、煩わしいくらいに蘊蓄話をしている事で？

回復弾と間違えて、睡眠弾をユウに撃ってしまった事で？

……ユウが私の事で村長に相談したとしたら、思い当たる節はかなりある。

悪いところがあったら治す。だから、そんな事なら直接言ってよ

……？

いきなり村長に相談されたら、お姉ちゃんちょっと傷付くよ……。

……。

……。

……。

「しまった！途中で水を加えるのを忘れてた！！」

気付いた時には既に“すり器”の中のげどく草とアオキノコは完全に粉になってしまっていて、もう使い物にはなくなっていた。……解毒薬を作るには、途中で水を加えながら混ぜ合わせる事が必須だと“調合書？入門編”に書かれていた以上、これは明らかに調合失敗だった。

考え事をしながら調合をするもんじゃないなあ……。

私は溜息を吐きながら、がっくりとうな垂れた。

トライアングラー 第三話

「キミは誰とキスをする」

## 事件発生より19時間前

結局、解毒薬の調合に失敗したのは余計な考え事をしていた最初の一個だけで、後の二つは上手く調合出来た。ただ、材料を三個分しか持っていなかったから、失敗した分　つまり私の分の解毒薬をどうしようかと、今悩んでいる。厄介なのはアオキノコだ。こればかりは村では手に入らないからどうしようもない。

ベッドに寝そべってぼんやりと天井を見ながら『ん……』と低く唸る。時々目を部屋の中央にあるテーブルへと向け、その上にぼつんと並んで置いてある二つの小瓶を見る。本当なら三つ並んである筈なのに……私の馬鹿。

反対側　ベッドのすぐ傍の窓に目をやってみる。いつの間にか陽の光は赤みを帯びていて、探せば空にはもう星の一つや二つは浮かんでいそうだ。もう夕刻か……とは言え出発までまだ数時間ある。武器や防具はすぐに装着出来るように用意してあるし、必要なアイテムも解毒薬以外はもうポーチに詰め込んである。弾薬も入るだけガンナーの防具に標準で付いている弾薬専用ポケットに入れてある以上、もうほとんど準備は完了している。



バサルモスは毒を噴き出す……とジンから聞いた。そしてラティオ火山には多くの毒を武器とするモンスター　イーオスとガブラスまで生息している。そんな環境へ解毒薬も無しに行くのは死に行くのに等しい。ジン達は荷物が増えるからという理由で持つて行かない事も多いらしいけど、そんな事は熟練したハンターだから出来る事であって、私達が到底出来る事じゃない。

やっぱり、どう考えても解毒薬は必要だ。三つでも足りないくらいかも知れない。

アオキノコの当てを考えて真っ先に顔が浮かんだのはユウとリルカだ。でも、あの子達がアオキノコとかを採取してる姿を見た事がないから、持っているかも怪しい。でもリルカはともかく、ユウならアオキノコも食材として利用する為に持っているかも知れない。

でも、ユウの事を考えると今日のお昼過ぎの事をどうしても思い出してしまう。

ちくん、と胸が痛む。忘れようと思っても、忘れられない。

……ユウはやめよう。

今会ったら、少なくとも私は妙にギクシャクしてしまいそうだから。

用件だけ上手く言えず、お昼過ぎの事を聞いてしまいそうだから。聞いてしまったらきつと、会話が止まって、息が詰まりそうな空気になるそうだから。

ベッドから起き上がると、私は駄目元でリルカのところへ行こうとした。家の扉を開けようと取っ手に手を掛けたところで、ふと、その手が止まる。

リルカの家はユウの家の隣だ。だから、リルカの家の前でもしかしたらユウに会ってしまう事になるかもしれない。

怖い。ユウを前にして、今の私がいつもの私でいられるのか、不安で不安で仕方がない。

たった一つの出来事をここまで引き摺る私なんて、大嫌いだ。何ですぐに忘れて踏ん切りを付けられないんだろう……。

取っ手へと出した手を戻そうとしたその時、トントントン、と目の前の扉が外からノックされる音がした。

ユウやリルカじゃない　と直感的に私はそう思った。あの子達が私の家に入るのにノックなんかした事がないからだ。

だけど、私の直感は外れた。

「ゼーラ姉、いる……？」

扉の先から聞こえてきたのは間違いなく、ユウの声だった。唐突過ぎる。まさかユウの方から私に会いに来るとは夢にも思っ てなかった。私にはまだ、あの子と話す心の準備が全く整って なかった。

ユウの言葉を返そうと口が何かを言おうとパクパクと開くんだけ ど、声にはならず消えていく。それでも何とか、大分間を開けて しまったけど、声を絞り出す。

「……いる、よ」

「入ってもいい？」

「……」

私はゆっくりと扉の取っ手へともう一度手を伸ばし、握った。そしてゆっくりとゆっくりと扉を開いた。

そこには、いつものユウの顔じゃなく、ちよつと無理に微笑んでいるように見えるあの子の顔があった。

ユウもきつと、今の私と同じ気持ちだ。何かに怯える子プーギーのような目をしている。私もこんな目を今、してるのかなあ……そう考えると、少しだけ、いつもの私を取り戻せたような気がして、自然と笑みがこぼれた。

「どうしたの？　いつものユウらしくないね」

「そうかな？」

「そうだよ。だって、いつものユウは私の家に来る時、ノックなんてしないから」

「……そっか」

家の中に入ったユウは真っ直ぐにテーブルへと歩き、その上に置いてある解毒薬を手にとって眺める。私は扉を閉めた後、ベッドの方へと戻ってそこへ腰掛けた。

解毒薬の入った小瓶を見つめながら、ユウが笑う。

「コレ、あんまり美味しそうな色してないね」

「冗談っぽく言うユウがおかしくて、私も笑う。」

「ユウったらそればかり。それは調味料なんかじゃなくてク・ス・リ。解毒薬よ」

「それくらい知ってるよ。ただ、こうして見ると何か緑色の得体の知れない液体だよな」

「それはそうと、ちゃんと火山へ行く準備は出来たの？」

「とりあえずは、ね」

トン、と手に持っていた小瓶をテーブルの上に元に戻し、私の方へ向き直る。表情がどことなく硬い。一度大きく呼吸をした……ように見えた。

「ゼーラ姉には言っておこうと思ってさ」

どくん、と私の心臓が大きく脈打つ音が聞こえた。

「……何を？」

「村長に話した、相談の事」

どくん、どくん、どくん。

ずっと気にしていた事、知りたかった事の筈なのに、いざという時になってそれを聞くのを怖がっている私がいた。

気付くと、私の口は動いていた。

「……興味ないよ」

「え？」

ユウが驚いた顔を作る。だけど、驚いたのは私自身もだった。

……何を言ってるんだろう、私は。

「ユウ自身が、話すのが辛くなるような内容なら、聞きたくない」  
「……」

「そんな顔、してるよ。……今のユウは。本当は話したくないんだ、って。この事を話したら、きっとゼーラ姉は傷付く、って」

聞いておかなくて本当に良いんだろうか。後悔しないんだろうか。

それでも、私の口は先を続けた。

「そんな内容なら、私、聞きたくない。いつかユウが笑ってその事を話せる日を、ずっと待つよ」

「ゼーラ姉……」

私は今、どんな顔をしてるんだろう。ちゃんと、いつものように笑っていられているんだろうか。ユウに不自然に思われていないだろうか。

…本当は気になって気になって仕方がないという事に、気付かれていないだろうか。

私は視線をユウの目から自分の足元へ向け、目を閉じた。

言ってしまった事はもう、仕方がない。……もうこれできっぱりと忘れよう。そうすれば私はいつもの私でいられる。ユウもきっと、いつものユウでいられる。

いつもと変わらない態度、言葉、仕草、表情。それ以上望むものなんて、今の私にはない。

やっぱり私は、今のユウとリルカとの関係が大好きなんだ。だから壊したくないんだ。

決めた、忘れよう。絶対に忘れよう。何が何でも忘れよう。

目を開けて顔を上げると、ユウの顔がすぐ目の前にあった。『えっ?』と思った時にはあの子はほとんど私へと顔を近づけて来て、その小さな唇を私の唇へ……。……。

……つて、ちょっと待ったあああああつ！！！！

私は思わず上半身をベッドの方へと反らせながら右手でユウのほつぺに平手打ちを炸裂させた。ぱしーん……と乾いた良い音が部屋中に響き渡る。

心臓がバクバクし、突然息が荒くなる。肩で息をしながら、私はとりあえず、声を出す。

「ななっ、なななななななっ！？」

「……っ、効くうゝ！」

「何しようとしたのよ、さっき！！」

「何って……ほら、分かるでしょ？」

分かる。分かるから私は焦っている。

何が何でも突然過ぎる。キスつてのはもっと雰囲気をこっ……もつと、さあ！ ゆっくりとゆっくりとそんな雰囲気を持っていってそれで……ってそうじゃなくて！

ユウが一步後ろへ下がり、痛そうに顔を顰めながら、それでいて笑いながら少し赤くなった左のほつぺを手で押さえる。

「少しは、いつものゼーラ姉に戻った？」

「……あ」

やっぱり、さっきまでの私はいつもの私じゃなかったんだ。さっきのアレはユウが私を気遣って、元気を取り戻させようとして

……。

そう、だよ。ユウが他意もなく、あんな事する筈ないもんね……。

……。

何で少し残念がってるんだろう、私は。

「ありがとう」

「こちらこそ」

私の微笑みに、ユウも笑って返してくれた。

そうそう、<sup>わだかま</sup>蟠りが無くなったところで、聞きたかった事を聞こう。  
忘れかけていた解毒薬を調合するのに必要なアオキノコの事。

「ところでユウ」

「あのね、いい加減気付いて欲しいんだけど？」

横にある扉の方から突然女の子の声がして慌ててそっちに目をやると、閉じた扉に凭れ掛かるような姿勢で、少し冷たい目で私達を見る、リルカがいた。左脇に一冊の本を挟み、右手に植物とキノコ  
げどく草とアオキノコを持って。

リルカが私の家に来た理由はすぐに察する事が出来た。でも私はそれより先に聞いておきたい事が。

「リ……リルカ、一体いつからそこに？」

…… あったんだけど、ユウに先に言われてしまった。

「さ・あ・ね！」

「何か……怒ってる？」

「べっつにい〜」

不貞腐れた表情のリルカがズカズカと足音を立てて歩き、テーブルの上にどさつと手に持っていたげどく草とアオキノコを置く。そして脇に挟んでいた本の表紙を私に向かって見せる。

「何なのよこの本は！　せつかく解毒薬を調査しようと思ったのにアタシが理解出来る事が何一つないじゃん！！」

表紙のタイトル　“調査書？上級編”　を見ながら、私は思わず吹き出してしまった。

「だって、その本は調査の上級者向けだよ。それだけ読んで理解出来るとは私、思えないなあ」

「……とにかく！　材料は持って来たから調査宜しく！　アタシは家に帰って寝る！！」

「今から寝ると何時間も掛かる馬車の中、寝れなくなるよ」

家を出ようとするリルカに、落ち着いた声でユウが言う。

「それでも寝る！　馬車の中でも寝る！　おやすみっ！！」

扉を開けたリルカの動きがふと止まり、私に向き直ったかと思うと、口を何度か動かしてすぐに扉から出ていった。

一体何の事？　“負けない”って、何？

「僕ら、リルカを怒らせるような事、したのかな？」

ユウの問いに、私はただ『さあ』と愛想笑いしか出来なかった。

“負けナイカラ”。



リルカの唇は確かに、そう言っていた。

×  
×  
×

事件発生より14時間前

辺りが真っ暗闇に包まれ、満天の星空が最も輝くその時間。

誰もが寝静まって、色々な夢を見始めるような、そんな時間。

私達は、ラテイオ火山に向けて、出発した。

T  
o  
b  
e  
n  
e  
x  
t  
...

## 第四話 「ミミック」

事件発生より13時間前

空気が、何だか、重い。

その原因ははっきりとしていた。

「……………ん……………ぐう……………」

ラテイオ火山に向かう馬車の前で待ち合わせした時から いや、その前の私の家にげどく草とアオキノコを届けに来た時から、リル力はどこことなく不機嫌だった。だから今も、馬車に乗った瞬間から蹲るようにして静かに寝息を立て、時々へらへらと笑ったりぼそぼそと訳の分からない寝言を呟いたりする。……………寝てるのか起きてるのか、傍から横目で見ていてもはっきりと言いつける事は出来ない。

馬車がごとごとと揺れる度に、私達は確実に目的地へと近付いている。だけどその道のりはまだまだ遠く、これから何時間も今と同じように揺られ続けなければならない。

だからこそ、この馬車の中で睡眠を摂る事は決して間違いじゃない。間違いどころか正しい行為である筈。時間を最も有効に使う、最も良い方法であるとも言える。

それなのに ……。

いつもこの時間 馬車に揺られ始めて一時間くらい は、私が喋りたい放題喋っているんだけど、リルカがあの子の調子だから、ユウだけに喋るのもどうかと思って遠慮している。喋ってもいいんだけど、リルカが『私はまだ聞いてないよ』と後になって私に詰め寄って来るかと考えると、二度手間になりそうだから迷う。

私は『ふわああ』と手を口に当てながら欠伸をし、少しぼやけた視界を元に戻す為に両目を指で擦りながら、同じくリルカを見ているユウへと視線を向けた。真つ赤なくざざミシリーズに身を包み、独特な形状のヘルムはあの子の髪や口元を隠していて、私からは少しだけ寂しげな両目しか見る事が出来ない。

ふと、ユウと目が合った。

「……リルカ、寝ちゃってるね」

ユウがそう言いながら笑う。その目からはさっきの寂しげな光は消えていた。

「寝てるねえ……。私の話がそんなに嫌いなのかな？」

「きつとそうだよ、アハハ」

「ん〜……そうなのかなあ……………」

はつきりと断言されると、あの子自身もそう思ってるんだと感じて、私の胸が少しだけチクンと痛んだ。だとしたら、ショック。こ

れからは喋り過ぎないようにと反省しなきゃ……。

「　　ってそんなに落ち込まないでよ！」

「だって……」

いじいじと指先で床をなぞって何かを描く。何の意味もない曲線と直線が交じり合い、だけどそれは決して何かの形にはなる事はない。その動きを止め、唇に寄せた指先に付着した白い埃をふつ、と吹き飛ばす。

「冗談だよ！　　リルカは全然ゼーラ姉の話が嫌いなんじゃないって！」

慌ててユウがフォローするけど、胸に刺さった棘が抜けても痛みは暫く続く物なんだよね。棘が刺さった傷、きつとすぐに治る。そう願いたかった。

私は『そうだよね』とユウに笑って返すと、もう一度“眠れるお姫様”へと視線を向けた。今は静かに寝息を立てている…ように見える。

“負ケナイカラ”。

不意に脳裏にリルカの唇が過ぎり、胸がドクン、と高鳴る。私はまだ、この言葉の意味が分かっていなかった。

状況から察するに、アレは私に向けられた言葉。リルカから私に向けられた敵対心の表れ。

だけど、それが一体、何を意味しているんだろう。

考えても考えても、答えなんて出ない。推測される数多の答えか

らたった一つの真実である答えを見つけ出す事なんて、私には出来なかった。

考え始めて真っ先に出た答えは、“ユウ”の事だ。だけど私にとつてあの子は弟で、あの子にとつても私は姉……それ以上でもそれ以下でもない。リルカがあの子に好意を持ってるって事は、初めて出会った時から分かってる。

その事なの？ リルカ……？

視線でそう問い掛けてみても、リルカから答えが返って来る筈がない。

私は一度大きく呼吸をして、もう一度ユウへと視線を向けた。

「バサルモスについて私が調べた事、話そうか」

「でもリルカが……」

私の言葉に、ユウがリルカの方を見てあの子の様子を伺いながら返す。

大丈夫。リルカはきつと、眠ってなんかいない。なんとなく、なんとなくだけで、そう断言する。私やユウが何か喋る度に、ぴくっ、と反応して身に纏っているくっくDシリーズ>が擦れて音を立てるくらいだから。

「ねえリルカ、本当は起きてるんでしょ？」

「寝てるわよっ！」

返事をしてる時点でバレバレなんだけどなあ……。

私はユウと目を合わせて、声を揃えて笑った。

トライアングラー 第四話  
「ミミック」

事件発生より5時間前

「火山って何でこんなに暑いのか？ んもーう、信じらんない！」

「何でって言われても……ねえゼーラ姉？」

「火山だから……って説明じゃ駄目？」

ギルドから支給されたアイテムを、青色のアイテムボックスから物色していたユウとリルカがその動きを一旦止め、同時に少し冷ややかな視線を私に向ける。その目は『それじゃ説明になってない』とそう言っていた。絶対そう言っていた。間違いなくそう言っていた。

そう言われても、『火山だから』って説明で納得されないんならそれこそ火山がどんな場所であるかだとか、マグマや溶岩の説明なんかもしなくちゃならない訳で、それはきっと何十分かあの子達を拘束してしまう訳で。

それでも宜しいのでしたらお話しますが、如何致しましょうかと、視線で返してみる。

「まあ……どんな説明をしてもらったところでこの暑さが紛れる訳ないか」

私の心の声を悟ったかのように、ギザミヘルムを脱ぎ額に浮き出て流れ出す汗を手の甲で拭いながらユウが言う。同じく頬を流れる汗を拭ったりリルカは、何も言わずにアイテムボックスの方へと向き直る。

ちなみに私の方と言えば、暑いのは確かに暑いんだけど、あの子達を感じてるよりは断然、暑くなかったりする。理由は勿論、身



に纏っている装備にある。

ああ、何てヒンヤリして気持ち良いんだろう、このくフルフルDシリーズ>は。この独特な着心地もたまらないいゝ……。

「もしもし？ ゼーラ姉？」

「駄目駄目、またいつちゃってるよ、あの目は」

「僕はあの触った感じは苦手だね、まるで本物のフルフルに触ってるみたいで」

「私も苦手」

ぽふつ。

「あいたあつ！？」

恍惚としていた私を現実の世界に引き戻したのはユウの放ったチヨップだった。思わず『あいたあつ！？』なんて言ってしまったんだけど、実際にはそれはまるで棒のような形に焼き上げたパンで殴られたような感覚で全く痛くない。あの子は絶対に女性には本気で手を挙げない、紳士だったりする。

「さ、行こうか」

ポーチの中に必要な支給品を入れ終えたユウが笑う。私は手でわざとらしくチヨップされた箇所を摩りながら、初めてアイテムボックスの中を覗き込んだ。中に入っていた物の大半は当然ユウとリルカが持ち去っていて、残されているのは回復薬や地図、クーラードリンクや携帯食料など最低限の代物と弾薬の類だけだった。弾薬の類も、もう持てるだけ持ってきたからこれ以上は必要ない。

私はポーチの中に回復薬と携帯食料、そしてクーラードリンクを

詰め込むと、それと入れ替えるように二本の瓶を取り出した。中で揺れる緑色の怪しい液体はまさしく解毒薬。

「ユウ！ リルカ！」

叫び、既に火山に向かって歩き出していた二人が私の方に向き直るのを確認してすぐ、私は二人に向かってそれぞれ解毒薬の入った瓶をばいっ、と投げた。下から放り投げられたそれは大きな弧を描きながら、無事に二人の手にぱしっ、と音を立てて届いた。

「喉が渴いたからってそれ飲んじゃ駄目だからね！」

二人が溜息を吐きながら、『子供じゃないんだから』と目で語る。

いいじゃない。

私にとって、二人はまだまだ子供なんだから。

×  
×  
×

## 事件発生より1時間前

火山の中はクーラードリンクがないとまるで地獄のようだ。だつて、それを飲んでいても汗は決して留まる事無く頬を伝い、喉がカラカラに渴くんだから。

さすが火山の中と言わんばかりに、地面のすぐ横には溶岩が流れていたり、地面から突然間欠泉が噴き出したりとなかなか騒がしい。こんなところに本当に生物がいるのかと思った矢先だ、ソレを見付けたのは。

獲物に気付かれないように息を殺しながら、そつと愛銃　<ス  
パルタカスファイア>を構え、照準に獲物の姿を捉える。……地面  
の中から這い出て来たばかりのガミザミだ。私に気付く事もなく、  
落ちている小さな石をその大きな鎌で器用に口へと運んでいる。

息を呑み、そつとトリガーに指を掛ける。ガミザミの移動速度は  
速く、その鎌の殺傷力は強いという事を知っている以上、確実に一  
撃で仕留めなければ自分の身が危ない。頬を伝う汗を拭う事もせず、  
私はようやくトリガーに掛けた指に力を　。

「とつぴよおりやあああおつ!!」

……入れようとしたところで、私の後ろから飛び出てきた青色の鎧を纏った一つの影が奇声を発しながら、私が狙いを付けていたガミザミに右手に構えた剣で斬りかかった。

……………相変わらず何て声を出すんだろう、リルカは。

私が銃を構えるのを止めて立ち上がる頃には、ガミザミは無残に斬り刻まれて、丁度あの子の剣の麻痺毒によって動きを拘束されていた。泡を吹きながらその目に映る物は、今まさに振り下ろされようとしている、ユウの大剣　<ブレイズブレイド>。

ガミザミは自らの運命を悟ったんだろうか。動けない身体、振り下ろされる得物、動くのは目玉くらい……。もし自分がその立場だったらと思うと、ぞっとする。

「はあっ！」

鈍い音と共に、ガミザミは見事に真つ二つになり、青黒い血を噴き出しながら絶命した。二人はパン、とハイタッチを交わし、ほぼ同時に二つに分かれた亡骸から甲殻とかを剥ぎ取りに掛かり始めた。

私は存在を忘れ去られているみたいだけど、大人の私は今更『私の獲物だったのに！』なんて嘆いたりなんか絶対しない。……とはいえ、あまりの強引さにちよつとこめかみに血管が浮き出そうなのは確かだ。『うゝ……』とファンゴみたいに低く唸りながら、私は二人の元へと歩き出した。

「ほい、ゼーラ姉」

私の存在にようやく気付いたユウが、笑顔で手に持ったソレを私に差し出す。血で染まったあの子の手の中にあるモノ。それは決し

て甲殻なんか類じゃなくて、もっと生々しい。

「……………いない」

私は思わずぷいと目を背けた。

例え高級食材だろうが、私は“ザザミソ”なんて触りたくない。食材としてお皿の上に並べて出てる物なら別だけど、採れ立てのそれは生々しく、そして妖しく黒光りしている。長く見てると嘔吐感が込み上げてきそうだ。

「ええ〜。じゃあボクがもらっよ」

「あーずるいつ！ アタシに頂戴よお！」

「やだ。リルカだったらこのまま食べちゃいそうだもん」

「誰がそのまま食べるかあああつ！！！！……………洗ってから食べるもん」

「ほら、やっぱり食べるんじゃない」

……………賑やかだ。ここが戦場だと言う事を忘れさせてくれる。でも、それは決して忘れちゃいけない。足を踏み外せばそこに待ち受けるは低くうねりをあげている溶岩、何もないところから突然攻撃を仕掛けてくるガミザミ、どこからともなく飛び掛ってくるイーオス。

そして。

私は見付けた。一見岩のようだけど、他の岩とは何かが違う、岩を。

「ユウ、リルカ。準備はいい？」

二人が同時に私に振り返る。だけど私の視線の先は、二人のもつと奥の、一つの大きな岩。ガチャリ、と再びくスパルタカスファイ

ア>を構え、それを照準に入れる。

「……アレが？」

「岩にしか見えないけど」

だけど私の目は誤魔化せない。あの岩が生えてる地面の根元、僅かにだけ奇妙な亀裂がある。それはきっと“奴”がここへ移動してきた時に生じたモノ。

その姿、まさに擬態<sup>ミミク</sup>。

私は今度こそ、ゆつくりとトリガーを絞った。瞬間、火薬が爆発すると同時に銃口から一発の弾丸が飛び出し、ビシッと音を立ててその岩に突き刺さった。

……さん。

「な、何も起きないよ？」

と、ユウ。

……にい。

「やっぱり見間違い！ ただの岩だったんだって!!」

と、リルカ。

……いち。

「そう決め付けるのは早計だと思うなあ」

……ぜろ。

ドオオオンッ！！！！

「ガアアアアアアアアッ！！！！」

“徹甲榴弾”が爆発したと同時にその岩が擬態を解き、耳を塞ぎ  
たくなるような咆哮と共に姿を現した。

岩を彷彿させるゴツゴツした大きな身体 間違いない、“バサルモス”だ。

「でかあ……」

ユウとリルカが同時に眩き、やがて得物を構える。

狩るモノと狩られるモノ、どちらが勝るか ……。

いざ、勝負！

T o b e n e x t …

## 第五話 「毒」

事件発生より30分前

火山の中は常に溶岩が蠢いていて、『ゴオオオオ……』という音が眼前の敵に照準を定めている時に煩わしく感じる。＜スパルタカスファイア＞を両手に持ったまま、敵 バサルモスの後方へ移動した私はすぐに銃を構え、トリガーを絞る指に力を入れる。途端、火薬が爆発する音と共に銃口から発射された弾丸が飛び出し、一直線にバサルモスの背中に突き刺さる……る事はなく、キーンという音と共に弾かれ、勢いを無くした弾丸が地面に転げ落ちる。

“通常弾Lv.2”でも駄目、か。“岩竜”でこれだけ硬いなら、成長した姿の“鎧竜”はどんなに硬いのだろう。

私はチツと舌打ちしながら、次の弾薬を銃に詰める間も惜しみ、



銃を抱えたまま再び走り出した。遠距離攻撃をメインとするガンナーはヒット&アウェイが基本だ。欲を出してそのまま打ち続けたところで、あの巨体に突進されたら一溜まりもない。ガンナーの装備は剣士に比べ、動きやすさを重視しているため脆い一面があるのだから。

走り出した瞬間、予想通りバサルモスが私の方を睨む。だけど残念ながら、あなたの相手は私一人じゃないのよね。バサルモスの後方にある二つの人影を見て、私は思わずニヤリと笑う。

二つの人影　ユウとリルカが攻撃を仕掛けバサルモスの注意が彼らに移ったところで、私は立ち止まって銃に弾薬を補給し始める。“通常弾”の類が駄目なら、破壊力のある物を選ぶしかない。手持ちの弾薬から選び出されるのはただ一つ、“徹甲榴弾”だ。けど弾が少ないから、無駄遣いは絶対に出来ない。慎重に、そして確実に使わなければ、私はこの狩りでただの足手まといに過ぎなくなる。

ガチャン、と弾薬をセットした銃を一旦背中に担ぎ直すと、私はバサルモスの正面に向かい、走り出した。

事件発生より20分前

「ユウ、リルカ！ 一旦離れてっ！！」

バサルモスの足元で剣を振るっていた二人に向かって叫び、私は“徹甲榴弾”がセットされた銃を構え、照準を定め始める。馬車の中で説明した通り、ユウとリルカはちゃんとバサルモスの腹部を集中攻撃しているようで、その腹部の甲殻は無残にも切り刻まれていた。……恐らく、甲殻を傷付けた程度でダメージはほとんどないだろう。だけどその行為は決して無駄じゃない。ううん、無駄にしない！

ユウとリルカがバサルモスから距離をとったのを確認した後、私は改めて銃を握る手に力を込めた。しっかりと狙いを定め、そしてトリガーに指を掛ける。

バサルモスが私を睨む。正面を向いてくれたおかげで、急所である腹部が簡単に狙う事が出来る。それでも絶対に外さないように慎

重に、慎重に銃口の向きを調整する。

「オオオオオオオオオツ！！！」

バサルモスが突然咆哮を上げる。距離があるとはいえ、火山内部という事もあり耳の鼓膜が破れるのではないかと思うくらいの轟音だけど怯んでいられない。これ以上ない好機を、逃す手はない！

私は隙だらけのバサルモスの腹部を狙い、トリガーを絞った。爆発音と共に発射された弾丸は一直線に腹部に直撃する。そして数秒の時間差を生じて、弾薬の方に詰まった火薬が爆発する。バサルモスの咆哮に負けにくいくらいの轟音が再び耳を襲う。耳鳴りが酷くなるがそれよりも、火の上がったバサルモスの腹部を見る事に神経を注いだ。

赤い、皮膚。

僅かにだけどさっきの爆発によって甲殻が抉り取られ、その隙間から赤い皮膚を覗かせていた。……だけどもだ ril 力の片手剣ならともかく、ユウの大剣で攻撃出来る程の大きさじゃない。私は再び“徹甲榴弾”を銃に補充しようとした。丁度その時だ。背後の何かの気配に気付いたのは。

「キヤアアツ！！？」

背中に走る何か重たい物が押し掛かってきたような衝撃と激痛。私は衝撃の勢いで前方に大きく転倒し、手に握っていた筈の銃が重力に引かれるまま地面に落ち、音を立てる。

ゴツゴツした高温の地面に顎をぶつけたけど、その痛みにも歯を食い縛って耐え、私はすぐに起き上がって何が起きたのか確認した。

目の前に立っていたのは、真紅の身体を持つ、一頭のイーオスだった。低い唸り声を上げながら私をじっと睨んでいた。頭の中が一気にパニックを起こし、優先的に何をすべきか正常に考えられなくなる。助けを呼ぶのか、銃を拾うのか、退くのか、素手で反撃するのか　多くの行動の選択肢が何度も頭を過ぎっては消えていく。

どうする？　どうすればいい？

不意に、そのイーオスの後ろから何か影が飛び上がった。

「　　っ！？」

反射的に身体が反応し、私は横転してその場から移動した。瞬間、さっき見た筈の真紅のイーオスが私がいた場所に着地した。

どうして？　さっきのイーオスじゃない……？

そう思っ、屈んだまま最初のイーオスがいたところへ目をやった瞬間　。

「あ……」

思わず、マヌケな声が出た。私が目にしたのは、最初に見たイーオスの喉元が大きく膨らみ、そしてその口から紫色の何かを吐き出す様。横転したばかりの私がそんなにすぐに反応して動ける筈もなく、私はその紫色の何かをもろに顔面に食らった。

液体……ううん、霧……？　痛くもかゆくもないそれが視界から消えると同時に、私の視界には改めて二頭のイーオスの姿が映った。すぐに立ち上がって、バックステップして間合いをとる。

ぐにやり、と一瞬だけ視界が歪んだ。ほぼ同時に肺に何か異物が混入しようとした時のように、突然咳き込んだ。それでやっと理解した。さっき浴びせられたのは、毒だという事に。

冗談じゃない……こんな状態でイーオス二頭と戦える訳が……。

上手く呼吸が出来ず、深く空気を吸おうとすると咳き込んでしまう。私は肩で息をしながらそれでも、迫り来るイーオスの毒牙を避け、頭から飛び込むような形で地面に落ちた銃にしがみ付いた。

「く……っ！」

衝撃で頭がくらくらする。立ち上がる気力まで奪われそうだ。だけど、こんなところで横になっていない場合じゃない！ 自分に『負けるな』と言い聞かせながら歯を食い縛り、立ち上がると同時に銃の銃口の付け根の部分を掴んだ。

向こうではバサルモスと戦っているユウとリルカがいるんだ。こんなところで立ち止まっていられる程、私は暇じゃない！

二頭のイーオスが爪を振り上げ、私を向けて振り下ろそうとする。だけど私はそれより速く、手に握った銃をイーオスに向けて薙ぎ払った。銃の柄の部分がイーオスの首に当たり、その勢いのままもう一頭のイーオスの腹部に当たる。不意に攻撃を食らわされたイーオスが後ろに大きく退くような形で怯んだ。

「あんた達なんかに……」

大したダメージなんか与えられないなんて事は分かってる。ただ一瞬だけ怯ませる事が出来ればそれで良かった。私は銃の柄を握り

そのままトリガーに指を掛け、二頭のイーオスの間の地面に向かってトリガーを絞った。

「構ってられないのよおおっ！！！！」

勢い良く地面に突き刺さった弾丸。体勢を立て直し、再び私に向けて仕掛けて来ようとするイーオス。どちらが早いのか、そんなの、言う間でもない。

地面に突き刺さった“徹甲榴弾”が炸裂し、その爆発に巻き込まれた二頭のイーオスの肉片が辺り一面に飛び散る。爆発の規模が小さかったせいで、二頭のイーオスの身体は半身ずつ無傷の状態で何事もなかったかのようにその場に立っていたけど、やがてゆっくりと地面に崩れた。

安堵した瞬間、再び視界がぐにやりと歪み、私は思わず後ろに尻餅をついた。すぐにポーチの中から解毒薬を取り出し、蓋を外して中の緑色の液体を胃の中へと流し込む。…初めて飲むけど、酷い味だった。

カラン、と放り投げた空きボトルが音を立てて地面に転がる。私は体力を回復させる間も惜しんで銃に“徹甲榴弾”を補充し、バサルモスを睨んだ。

×××

事件発生より10分前

「ユウ！ リルカ！ 大丈夫！？」

射撃できる範囲まで移動したところでユウとリルカへと呼び掛ける。バサルモスの位置がさつきと比べて奥へ移動しているところを見ると、二人が私の状況を見て困になってくれていたみたいだ。二人の防具を見るとところどころ欠けていたりヒビが入っていたりしているのが分かる。……私がイーオスに手間取っていたせいだ。自分のせいではないとは言え、悔しくて唇を噛む。

バサルモスの方かというと腹部の甲殻がさつきよりも剥がされ、赤い皮膚の箇所が大きくなっていて、そこからは赤黒い血が噴き出していた。ジンに聞いた通り、腹部の甲殻を剥がす事が出来れば致命傷を与える事も難しくないみたいだ。

こうなっている以上、私が腹部の皮膚を狙う為に二人を退かせるのは非効率だと判断出来る。だとすれば私が出る事は、もう一つの弱点である顔を狙う事だ。幸いにもバサルモスは巨体だから顔を狙ったところで下にいる二人が何らかの被害を受ける事は少ないだ

ろう。……血や肉片を頭から被る事にはなるかもしれないけど。

“徹甲榴弾”も今銃にセットされている物で最後だ。絶対に外す訳にはいかない。

銃を構え、バサルモスの顔に照準を定めようとして、私は異変に気付いた。

手が、震えている。武者震いなどの類なんかじゃなく、目に見えてはつきりと銃口が震えている。原因は今も尚私の身体を巡っている、イーオスから受けた毒であるという事をすぐに察した。やはり解毒薬とは言え、完全に解毒が終わるには多少なり時間が掛かるみたいだ。

もつつ、こんなんじゃ撃てないじゃない！

憤りをどこへぶつける事も出来ず、銃を構えたまま何度も照準を定めようと試みるも、どうしても銃口が震えてしまう。

私はもう、二人の戦いを見守るしか出来ないの。悔しくて涙が零れそうになる。何かしたい、何かしなければいけない。だけどガンナーの私が二人に混じって前線で戦える筈がない。

「ゼーラ姉、危ない！」

ふとユウの声がして改めて前を見ると、バサルモスが私を睨んでいた。ドシン、と大きく足音を立て、『コオオオ……っ！』と息を荒げる。

まずい、突進するつもりだ。私はすぐに銃を背中に収める。だけど、バサルモスの方が早く、私に向け走り出していた。



ドシンドシンドシんっ！！

足音がどんどん近付いてくる。私はバサルモスの突進の軌道上から離れようと走り出すけど、この距離じゃ回避は間に合わない！

どうせ回避が間に合わないなら　と、私はポーチに手をつ込み、すぐに棒状の物　閃光玉を取り出した。トリガーである線を引き抜き、迷う事なくバサルモスへ向かって投げ　るのではなく、自分の頭上へと投げた。閃光玉は線を引きしてから炸裂するまで若干時間が掛かる為、バサルモスに投げつけたところで目の前で炸裂するか分からないからだ。

「目を閉じて！」

叫び、私は覚悟を決め、祈るように目を閉じた。閃光玉が炸裂するのが先か、バサルモスの巨体が私を押し潰すのが先か。閉じた瞼越しに光が見えるのが先か、天国へ渡るのが先か。

答えは　前者だった。

瞼越しに一瞬だけ明るい光が広がり、すぐに暗闇に戻った。それから数秒間目を閉じたまま待っても痛みは来ない。助かった、と私は安堵しながら目を開いた。

「わっ！？」

目を開けて、すぐに焦った。すぐ目の前にバサルモスの赤い皮膚が見えたからだ。私は慌てて後ろに向かって走り、少しだけ距離を置いた。……チャンスだ。この距離ならば例え手が震えようと、確実に攻撃を喰らわせる事が出来る。それも狙いにくい頭じゃなく、

腹部に。

閃光玉により視界を塞がれたバサルモスが、頻繁に目をチ力チ力させている。私はすぐに銃を背中から取り外し、構えた。

……何か、おかしい？

ふと気付いた。バサルモスが突然目を閉じたまま、腹部を地面に当たるくらいにまで下げた。何かのポーズ……攻撃の前兆？ そういった不安が胸に一杯に広がり、頬を冷や汗が伝う。

「ゼーラ姉、大丈夫！？」

「来ちゃ駄目っ！！」

ユウの声に反応して叫んだ。バサルモスが何をしでかすか分からない今、不用意に近付くのは危険だと判断したからだ。

叫んだ瞬間だった。バサルモスの身体から突如紫色の霧が噴き出し、一面を覆ったのは。私はすぐに察した。それが、毒であると。

だけどこの攻撃の好機を逃す手はない。私は息を止め、トリガーに掛けた指に力を入れ始める。

霧が晴れ、視界が徐々に回復すると同時に、バサルモスの姿が見えるようになる。私の方へ前のめりになり、口を大きく開いていた。この状況で狙うところは一つ！

決め台詞の一つでも言ってからトリガーを絞りたかったんだけど、まだ毒が残っているかもしれないこの状況で喋る訳にはいかない。

私は無言のまま、バサルモスの口の中を狙い、トリガーを ……。

T  
o  
  
b  
e  
  
n  
e  
x  
t  
:  
.

絞  
っ  
た  
!  
!

## 最終話 「ラスト・キス」

事件発生より5分前

ドクン、と心臓の鼓動が弾丸の発射音の後にはつきりと耳に聞こえた。＜スパルタカスファイア＞から発射された“徹甲榴弾”が眼前の巨体 バサルモスの口の中へ消えていくのを肉眼で確認した後、私は不覚にも発射の反動に足腰が耐え切れず、後ろへ倒れて尻餅をついてしまった。それでもバサルモスを睨み付けながら心の中でカウントダウンをする。……撃ち込んだ“徹甲榴弾”が爆発する、その時を。

さん。

バサルモスが口を更に広げ、威嚇の為か『コオオオ……』と低く唸る。

にい。

ふと、私の視線から目を逸らすようにバサルモスが向きを変える。

いち。

その先には、愛剣<ブレイズブレイド>を杖代わりにするように地面に突き刺し、その柄にしがみ付いて立っているユウの姿があった。多分、さっきバサルモスが噴射した毒をもろに浴び、吸ってしまったんだろう。

私ともう少し早くバサルモスの行動に気付き、『来るな』と伝える事が出来れば良かったんだけど……だけど大丈夫！ 解毒薬だってあるし、バサルモスがあなたを襲う前に私の撃った“徹甲榴弾”が爆発するから！

ぜろっ！

カウントダウンが終わり、思わずニヤリと口元が緩む。爆発すれば恐らく奴に致命傷を与える事が出来る。そう、爆発さえすれば……。

だけど、“徹甲榴弾”は爆発しなかった。

嘘……この場面で、最後の一発が不発……っ！！？

心の奥底から突如湧き上がる絶望感に全身に鳥肌が立つ。嘘だ夢だ幻だと信じたい私がいる。だけどそれは決して幻なんかの類じゃなく……紛れもない現実。

バサルモスが一步、そしてまた一步ユウに向けて近づいていく。ユウの目はバサルモスを睨んでいるものの、剣に縋り付くだけでも必死の様子だ。このままじゃ……ユウが危ない。

私の脳は私の予想を裏切り、冷静だった。私は何をすべきか、どの行動が最適なのか一瞬で判断する事が出来た。ギリリと歯を食い縛りながら、私はまず立ち上がろうと足に力を入れる。立ち上がる

までは良かった。だけどその瞬間、さつきイーオスの毒を浴びた時のように視界がぐにやりと歪み、私は思わずユウと同じように銃を杖のように地面に突き、それに縋る事で前のめりに倒れるのを防いだ。

毒だ。さつきのイーオスのがまだ切れてないの？ それとも。

どちらにしろ、こんな状態じゃ満足に動けない。こうしている間にもバサルモスがユウへと近づいている。その足音が、私の耳には死神がゆつくりと標的に近づいていく音に聞こえた。標的の首を掻っ切り、魂を奈落の底へと連れて行こうとする死神……実際、そうなのかもしれない。でも、死神にユウを連れて行かれない！！

「……っ、ユウ、逃げてっ！」

叫ぶけど、あの子が私と同じ状態だという事は聞く間でもない。満足に動く事も出来ない身体……そうだ、毒の種類は違えど、あの時のガミザミと同じ状態なんだ。リルカの＜デスパライズ＞の麻痺毒に中あてられ、ユウの＜ブレイズブレイド＞で両断された、あのガミザミに。あのガミザミが見ていた光景が、今の私とユウが見ているそれなんだろう。……あまりにも残酷だ。ある程度の予想は出来ていたけど自分がいざ経験すると、身体が恐怖に震え上がってしまう。

そうだ、リルカだ！ リルカは今。

咄嗟に目でリルカを探す。その姿はすぐに見つかった。＜デスパライズ＞を片手に、バサルモスの側面から足を斬り刻まんとするところだった。正面に回ってバサルモスを止めるより、そうやって自分に注意を惹かせた方が良いと判断したんだろう。その判断は間違

ってない。間違っていないんだけど……。

私が、行かなきゃ。

私は<スバルタカスファイア>に縋り付くその手を離し、ユウへ向かって走り出した。足がもつれ、何度も転びそうになる。視界が乱れて更に気持ち悪くなり、吐きそうになる。だけど立ち止まる訳にはいかない。立ち止まったらユウも、そしてリルカの身までも危険に晒されてしまう。私がやるしかないんだ。そしてリルカの反射神経を信じるしかないんだ。

バサルモスがついに足を執拗に攻撃するリル力を鬱陶しく感じたんだろうか、ユウの方へ向かう足を一旦止め、そしてその足を大きく前に踏み出した。……予想通りだ。鬱陶しい外敵をその大きな尻尾で薙ぎ払おうとしている。だけどその尻尾の攻撃範囲にはリル力だけじゃなく、ユウもいる。

「伏せてっ!!」

リルカがその攻撃に、そして私の声に反応出来る事を信じ、私は一気にユウに向かって飛び掛った。

間に合って　っ!!

ユウを飛び掛りながら突き飛ばした直後、ビュオン　と風を切る音が聞こえたのとほぼ同時に私の横腹に強い衝撃が走り、私の身体は大きく吹き飛ばされた。ぐるぐるぐる……と視界が赤い地面、バサルモスの姿、赤い天井と代わる代わるに写り、やがて地面に叩きつけられた。フルフルの皮で作られた鎧があるとは言え、衝撃は鎧を突き抜けて私の身体に伝わり、肋骨の一本でも折れたんじゃない

いかと思うくらいに激痛が走る。それでも目だけは、しっかりとバサルモスへと向けた。

地面に突き刺さっていたユウの剣がバサルモスの尻尾に私と同じように吹き飛ばされ、ユウとはかなり離れた場所に落ち、そしてユウは私が突き飛ばして地面に突っ伏したままだった。リル力はどうやらバサルモスの攻撃にも私の声にも素早く反応できなかったらしく、私とユウと全く離れたところで倒れていた。

最悪の状況だ。私の身体は動く事を拒み、酷い嘔吐感とこのまま永遠に目を閉じてしまいたいくらいのたるさが私の心でさえも蝕んでいく。私はもう、駄目だ。後はユウとリル力に賭けるしかない。二人の強さに、賭けるしか……っ！！

バサルモスが無常にも、再びユウへと迫る。だけどその瞬間、ユウが動いた。うつ伏せに倒れていたところから仰向けに寝転がり、遠くからでも荒い息をしていると分かるくらいに大きく胸を上下させながら、ダイミョウザミの甲殻から作られた、フルフェイスマスクのようなヘルムを脱ぎ捨てる。同時にあの子の青髪がバサリと風に煽られたかのように靡いた。そして手に持ったそれをそのまま、バサルモスの口へと投げ付けた。意図はすぐに分かった。バサルモスの口内に突き刺さっている“徹甲榴弾”に外から衝撃を与えて爆発させようとしてるんだ。だけどそのヘルムはバサルモスの口に対して大きすぎて、上手く口に入らずに弾かれてカンと音を立てて宙に舞った。

一步、そしてまた一步。ゆっくりだけど確実にユウへと近付いていくバサルモス。だけどユウは諦めず、今度は腰に提げたポーチに手をつ込んで何か投げる物を探す。何かを見つけては口に向かって投げ、でもやっぱり口には上手く入らなくて、地面に落ちてはガ



チャン、パリンと割れる音がする。

祈るしかなかった。私にはもう、そうする事しか出来なかった。こうしている間にも闇の底へと落ちるような脱力感が、私の瞼を閉じようとしている。だけど必死にそれに対抗し、私は奇跡が起こるのを待った。……私の身体はもう、待つしか、出来なかった。

ユウが悔しそうに仰向けの状態で、地面を殴る。だけど遠くからでも分かる、その目は、『絶対に諦めない』と炎を灯らせているのが。

……そうだ、私は何を諦めているんだろう。私の身体は本当に動けない？ そんな事ない、絶対にそんな事ない！ 動け、動け、動け、動け、私の身体！ 奇跡が起きるのを待つんじゃない！ 私が、奇跡を起こすんだ！！

動ケ！！ 私ノ身体アアアアアツ！！！！

ドン、と拳を地面に叩きつけ、動く事を拒む怠慢な身体に必死に鞭を打ち、かろうじて立ち上がる。何か支えがないと倒れそうになるふらふらの身体。だけど、立たなきゃ……前に進まなきゃ……私は一生後悔する。生き残るんだ、皆で！

その瞬間だった。

コン、と私の耳に届いた音は、さっきまで私の耳に届いていた音とは違っていた。それが何の音なのか確認する前に、轟音が私の耳を劈いた。鼓膜が破れそうな程の轟音　爆発音。バサルモスを見ると、口から煙を吹きながら、倒れまいとふらふらと足を何度も動かしているところだった。

すぐに悟った。ユウの投げた何かが、上手くバサルモスの口内の“徹甲榴弾”を爆発させたんだ。

その瞬間、私は一気に気が抜け、そのまま後ろへ倒れた。

トライアングラー　最終話  
「ラスト・キス」

## 事件、発生

倒れ、ない？

最後の一発である“徹甲榴弾”で致命傷を与えられると信じていた。だけどそれが爆発した今も、バサルモスは倒れる事はなかった。

くそお、私は一体何をやってるんだ……。狩りの決着も確認しないで、気を抜くなんて……。

バサルモスが倒れている私を睨み、そして同じく倒れているユウを睨んだ。こんな状態で攻撃を仕掛けられたら一溜まりもない。一旦気が抜けてしまった私の身体は、今度こそもう動きそうにない。

終わった　本気で、そう思った。そう、思ってしまった。

だけど、私の予想とは裏腹に、バサルモスがとった行動は　私達に背を向ける事だった。足を辛そうに引き摺りながら、紅くうねる溶岩の中へ消えようとしている。その姿は自分をここまで追い詰めた私達を称えるようなものじゃ決してなく、自らの生命の限界を悟り、死を恐れて必死に逃げるようだった。だけどそれに罵声を浴びせたり、追い討ちを掛けたりするような元気は私達にはなく、た

だバサルモスを見送る事しか。

「ちょっと待ちなさいよ！！ 私はまだ闘える！！」

いつの間にか立ち上がったリルカが、剣を片手にバサルモスの背中に罵声を浴びせる。……私達の状況を把握してから言つて欲しい。だけど私やユウにはリルカの行動を制止するような元気はなく、そしてバサルモスもその声に反応する事もなかった。バサルモスは振り返る事もなく、ゆっくりと静かに、溶岩の中へと消えていった。

火山に静寂が戻る。聞こえるのはただ、溶岩がうつねる低い音だけ。

はあ……と長い溜息が漏れる。

危機一髪だった。これ以上戦闘を続けられていたら、少なくとも私とユウは間違いなくやられていた。

「ユウ、ゼーラ姉、生きてる！？」

リルカの無駄に元氣そうな声に、私は手だけ挙げて答える。……生きてるけど全然、元氣じゃない。それはユウも同じで、リルカの声には手だけ挙げて答えていた。リルカがユウに駆け寄り『おゝいとぺちぺちと頬を叩く。全く、私もユウも毒に中てられて辛いというのに。』

リルカがユウを支えて起き上がらせると、そのままユウの手を自分の肩に回してゆっくりと私の元へ歩み寄ってくる。ユウの重い身体を上手く支えられず、ちょっと苦しそうにふらふらとしながら、それでもリルカはしっかりと私に近づいてくる。やがて私のすぐ近くまで来るとユウを地面に寝かせ、

「あゝ重かった」

と、肩を回しながら呟いた。その様子を見る限りバサルモスから受けた傷は大した事はなさそうだ。それに、バサルモスの毒も受けていないみたいだ。

「二人揃って毒に中てられちゃってるの？」

「……そう、みたい、だね。ハハ……」

ユウが言いながら力なく笑う。本当に辛そうだ。……かと言う私も決して辛くない訳じゃない。それでもこれ以上気を抜いたら気絶してしまいそうなくらい、辛い。だけどそんな私よりも、ユウの方がずっと具合が悪そうだ。もしかしたら私は解毒薬を飲んだおかげで、バサルモスの毒も多少なり効果が薄くなっているのかもしれない。

「解毒薬は飲んだ？」

「私は飲んじやって……もうない」

「僕も、ない……」

「飲んじやったぜーラ姉はともかく、何でユウもないのよ!？」

リルカが驚いて声を上げる。驚いたのは私も同じだった。

……そうか、そうだったんだ。あの時バサルモスの口内の“徹甲榴弾”を爆発させる時に、一緒に解毒薬も投げていたんだ、ユウは。だとしたら、今この場にはリルカの分の解毒薬しかない訳で……という事は……私とユウのどちらかが、解毒薬を飲めない事になる状態から考えて、解毒薬を飲むべきなのはユウの方だろう。私は、村に戻るまで何とか耐えるしかない。だけど村までは馬車で数時間、それまで私の体力は持つんだろうか……？

「……………とにかく、ユウは“これ”飲んで！　ゼーラ姉は私が……今すぐ解毒薬の材料を探して来るから！」

リルカがポーチの中から取り出した一本の解毒薬をユウに差し出す。ユウがゆっくりとそれに手を伸ばし、掴もうとした瞬間、突然ゴホゴホと咳き込んだ。その咳の音が、普通とは少し違う事に私は気が付いた。どこか、濁っていた。

ポタ、ポタリ。

ユウの口から、赤い液体が数滴、高熱の地面に落ちてジュツと音を立てた。それは間違いなく、あの子の血だった。

「ちよつと大丈夫！？」

「うん……平気。解毒薬飲んだら、多分直るから……」

……違う。肺を毒に中てられただけで出血するなら、私も同じ状態の筈。だけど私には吐血するような感じはない。バサルモスの攻撃を受けた際に怪我をした……？　でも攻撃を受けたのは私がイースと対峙している時だろうから、今まで何もなかったのは少しおかしい。一体、どういう事……？

「ユウは早くそれを飲んで！　ゼーラ姉は私が戻るまで頑張つて！　それじゃっ……」

言うや否や、リルカは手に持った解毒薬をユウに押し付けると全速力で別のフロアへと続く道へと駆け出し、私達が声も掛ける間もなく姿を消していった。……リルカ、あなたは本当にこのラティオ火山……こんな環境にげどく草があると信じてるの……？　この火山を隈なく探した事はないから断言は出来ないけど、存在する可能性

なんて限りなく低いように思う。でも、私も村に戻るまで体力が持つとは信じられなかった。ならやっぱり、材料が見つかるという奇跡を待つしか……。

「ゼーラ姉……元気？」

ユウが私に声を掛ける。さっきと同じように、力なく笑いながら。

「何とも言えない状態だけど……少なくとも、ユウよりは元気だと思っよ」

私は答える。ボーっと天井を眺め、無理に笑顔を作りながら。

「そ、つか。……良かった」

言い終わると同時に、ユウがまた咳き込む。ポタ……ポタリ、とさっきと同じ音が聞こえた事から、また吐血したんだと分かった。毒のせい……？ 違う、多分、それだけじゃない。あの子の身体に、何が起きてるというの？ 私には見当も付かなかったけど、ただ、尋常じゃないという事だけは分かった。

「……ユウ、あなた」

「飲みなよ」

私の言葉を遮るように、ユウが言う。飲む、って何を……？

「この解毒薬、ゼーラ姉が飲んで。僕なら……大丈夫だから」

「大丈夫な訳、ないじゃない。そんなに辛そうなのに……っ！」

何でこんな事言っただろう。

私には、理解出来なかった。

ユウはそれさえ飲めば助かる。私だって、リルカがげどく草さえ見つければ……見つからなくても村に無事に帰るまでもなく、帰り道にある集落や村で解毒薬を分けてもらうだけで助かる。こんな辛そうな状態なのに、何で私の事を優先しようとするのよ。今それを飲まなかったら、ユウ、死んじゃうかもしれないのよ。

私にずっと面倒を見てもらったその恩返し？ そんなの、恩返しじゃない。ユウがずっと生きて、これから私の傍で笑っていてくれる事の方が、私にとってはずっとずっと嬉しいんだよ？

なのに ……。

どうして、私の気持ちは分かってくれないの？

ずり、ずりと何が地面を這う音がして、私はふとその音がする方向を見た。ユウが自分の身体を引き摺ってまで、私の元へと近寄ってくれていた。すぐ近くまで来たところで、ユウが左手を地面に付いて身体を支え、そして右手で緑色の液体の入ったビンを差し出す。

「……ほら」

「私は、飲まない。リルカの願いでもあるし、ユウが飲んで」  
「嫌だ」

ユウが更に私に近寄って、ビンの蓋を空けた。そしてその空いたビンを、仰向けに寝転がっている私の口元へ運ぶ。少し、苦い臭いが私の鼻腔を衝いた。



「……飲んで、よ」

当然私のする事は決まっている。頑なに口を閉ざし、それを阻止する事だ。私がこうしていれば、ユウも諦めてくれる……そう思った。唇に触れるビンの冷たい感覚が、ひんやりとして少し気持ち良い。それもやがて、終わった。……ユウが、諦めてくれたんだ。

ユウが仕方ないと言った様子で口に解毒薬を含んだ。それを確認して、私はゆっくりと目を閉じた。

そう、それでいい。それでいいの、ユウ。

後はリルカが戻って来たら、火山から出よう。そしたら村へ。

「ん……」

不意にすぐ近くからユウの声が聞こえた瞬間だった。私の唇に、何か柔らかい物が触れた。そして僅かに開いた口の中に、何かどうどろした物が入ってくる。この味は……解毒薬!!?

目を開けると、目の前にユウの顔があった。

そして気付いた。

私、今、キス……されてる………?

「んっ、んんんん~~~~~っ!!!!?」

「……んっ」

私の唇からユウの唇を剥がそうとしても、ユウの唇は全然剥がれてはくれず、私の口をぴったりと塞いだままだった。…熱い。口の

中も、頭の中も、そして私の胸も……とろけそうなくらい、熱かった。

ゴク、ン。

だから私は、無意識の内に飲み込んでしまった解毒薬の存在を、少しの間だけ忘れてしまっていた。

……ああ、そうだったんだ。

私も、この子の事が好きだったんだ。

いとおしい程に、狂おしい程に。

……私の目から、涙が、零れた。

何でだろう、何で泣いてるんだろう、私。

悲しくて、嬉しいから……？

何で、私は……。

私の口を塞いでいた物が突然なくなり、口からさつきとは違う熱い空気が流れ込んで来る。私はガバツと慌てて上半身を起こそうと

したけど、まるで金縛りにでもあったかのように、私の身体はそれを拒んだ。……違う、私の体の上に何かが押し掛かっているんだ。

私に覆い被さるような形で、ユウがぐったりとしていた。

「ちよっ……ユウっ!？」

「……………薬、飲んでくれたんだね……………」

ぐったりしたまま、顔を起こす事もなくユウは答えた。

私の目からまた、涙が零れた。

「何で……何でこんな事をしたのよ？ 私よりユウの方がずっと危険な状態だったじゃない!! 何で私なんか……っ、私はユウに生きていて欲しいのに!!」

「それは……僕も同じ気持ちだよ」

「違う……違う! ユウにはリルカがいる! あの子の為に……生き残るべきはユウなのよ!」

ユウがまた力なく笑う。…………何が、可らしいのよ。

「諦めが早いよ、ゼーラ姉……。リルカが戻って来れば、ちゃんと二人共助かるんだから……………」

「だけど……ユウが……っ!」

リルカが戻って来るまで、ユウの体力が持つとは考えられなかった。もし見つからなかったとしたら……うつん、諦めちゃ駄目! さっきユウに言われたばかりじゃない、何を考えてるのよ私は! リルカはきつとげどく草を持って帰って来る、絶対に! ユウだって、絶対に助かるんだ!

絶対に  
……。

……。

……。

「……………ユウ？」

あの子の荒い呼吸が、突然、聞こえなくなった。

「ユウ……?」

もう一度問いかけて見る。

だけど、返事が返って来る事は……なかった。

ゆっくりと、そして優しくユウの身体を私の上から降ろし、仰向けに寝かせる。

ユウの顔を覗き込む。

……とても、穏やかな顔をしていた。

穏やかな顔で。

もう、ユウが呼吸をする事も、目を開く事も、笑顔を作る事も。

動く事も、なかった。

ポタ、ポタリ。

私の頬を伝う涙が、ユウの頬に落ちる。その雫がその場に留まる事はなく、ユウの頬を伝って地面に落ち、音を立てて蒸発する。

私の喉から嗚咽が漏れる。私の中の何かが爆発しそうになる。

「ユウ……っ」

その言葉はもうユウに届く事はなく、ただ、反響してその場に波紋のように広がって、どこからか吹く風に流されていくだけ。

私はただずっと、ユウの顔を眺めていた。

ずっと、ずっと　……。

……。

一体どれくらいの時間、こうしているんだろう。多分、何分も何十分も過ぎてるんだと思う。だけど私の中の時計は止まっていて、この瞬間が永遠に続いていくんじゃないかと、錯覚さえする。ただ物事には永遠なんてものはなく、それは命だって同じ事。生ある者はいつか必ず死に誘われる。それが自然の摂理。……それを受け入れようとする私は、ただの傲慢なのだろうか。

そんな事をただ考えていたから、声がするまでその存在に気付かなかった。

「　ユウ？」

リルカだ。顔を上げるとリルカが私の正面に立っていて、ユウの顔を眺めていた。手に……一本の植物　げどく草を持って。

私はもう、何も考えられなかった。

リルカがユウに縋るように泣きじゃくる光景も、ただの景色を見ているかのようにだった。

その真っ赤に腫れた目が、やがて私を睨んだ。

「　あんたさえないなければ……っ、あんたさえないなければこんな事にはならなかった！　ユウが死ぬ事なんてなかった！！」

「……」

「何であんたが生きて、ユウが死ぬのよ!? 逆でしょ!? アタシのあげた解毒薬、どうせあんたがユウから盗って、自分だけ助かろうとしたんでしょ!」

否定する気もなかった。私があの子を殺した事は……紛れもない、事実だから。

「あんたさえ最初からいなければ、ユウはずっとアタシのモノだった! あんたが来てから、全部変わっちゃったのよ! アタシ達のお父さんとお母さんが死んだだってあんたのせいだ! 何もかもあんたのせい!」

自分に浴びせられる罵声も、どこか心地良いものだった。罵声がこんなにも心に染み込んで行くものだなんて、初めて知った。

……………サイテーだ、私。

「ゼツイーラルファルケン!! あんたさえいなければあああああああつ!」

リルカが振り上げた<デスパライズ>の刃が私の顔に迫る。……避けるつもりなんてこれっぽっちもなかった。殺して欲しいとも、思っていた。このまま絶望を引き摺りながら、生き続けたいだなんて思わなかった。

だけど、<デスパライズ>の刃は私の目の前で、止まっていた。“目と鼻の先にある”というのは、こんな状況を言うのだろうか。その刃は、私の顔からほんの数センチメートルしか離れていなかった。



「どうして、否定してくれないのよ……？」

「……否定………？」

「解毒薬はユウが自分から飲むのを拒んだんでしょ……？ あんたの意思じゃないんでしょ……？ あんたがユウを殺したなんて、アタシの勘違いなんでしょ！？」

……リルカが何を言ってるのか、私には分からなかった。

「否定してよ……。そうじゃないとアタシ、本当にゼーラ姉を殺しちゃうよ……？ 本当は、大好きなゼーラ姉が大好きなユウを殺したなんて信じたくないの……っ。だから、否定してよ！ ただ一言、『私はやってない』って言ってよおっ！！」

リルカの目からまた、涙が零れる。同時に、私の胸がキュン、と熱くなった。

「お願い……ゼーラ姉」

カラン、とリルカの手から<デスパライズ>が離れて地面に落ちる。

「私は ……っ!？」

口を開き、何かを言おうとした瞬間だった。突然、リルカの足元から黒い煙がぼんやりと浮かび上がってきた。何かが地面から飛び出そうとしているのが分かった。それが何であるか確認するより早く、私の身体は動いていた。

「リルカ、危ないっ！」

「えっ」

その場からリル力を突き飛ばそうと、私は立ち上がって、ユウをバサルモスの尻尾から守った時のように、頭からリル力に向かって地面を蹴った。

だけど、私の動きは遅かった。

「きゃああつ!?!」

「あうっ!」

私とリル力の間で何かが爆発したかのような衝撃だった。……実際、そうなのかもしれない。それが何かを確認する事も出来ず、私達の身体は衝撃に大きく吹き飛ばされた。私の身体は暫く空中に浮き、やがて壁に衝突してようやく止まった。背中に受けたその衝撃で咳き込む。ズリッと壁伝いにしゃがみこみ、ゲホゲホと何度も咳をした後、改めて自分がいた場所を見た。

そこには、何もなかった。

そこには、誰もいなかった。

すぐ近くにユウの亡骸があるのは分かった。だけど、リル力の姿がどこにもなかった。だだっ広いこのフロアで、人がそんな短時間に消える事が出来る筈がなかった。でも、フロア全体を見渡しても、クック装備の人間の姿を、私の目は見つける事が出来なかった。

二人の間で何かが爆発して、私達は吹き飛ばされた。だとすると、リルカも私とは正反対の方向に吹き飛ばされた筈。

その吹き飛ばされたであろう場所に ……。

蠢く、紅き溶岩があった。

ドクンドクンドクンと心臓が突然高鳴り始める。私の足は、速かった。駆け出し、その溶岩の元へ近づくと、やがてそれは見えた。

赤い、真っ赤な色をした、手の形をした何か。

それが溶岩の中から生えていて、そしてゆっくりと……沈んだ。

「うあ……ああああ……う、あああああああああああ  
っ……！」

心臓が止まってしまうくらいに胸が締め付けられるような感覚。痛い、とんでもなく痛い。枯れたと思っていた涙が、また、私の目から零れ落ちる。大粒の涙が、いくつも、いくつも。

「やだあ……やだやだやだやだやだあ……っ!!」

何でこんな事になってしまったんだろう。

何で、こんな事に……。

「やだよお……私だけだなんて……ユウ、リルカあ……っ!!」

私はその場に蹲り、子供が駄々をこねるように……ただ、泣きじやくった。そうする事しか出来なかった。

あまりにも残酷な現実。ほんの数時間前の二人の様子が、幾度となく脳裏を過ぎっては消えていく。

……一人ぼっちだ。また、一人ぼっちだ。

やがて私の目は何も見えなくなって、深い深い暗闇に包まれた。私はそれに抗う事もせず、ただ、『私も二人のところへ連れて行って』と祈りながら……運命に身を委ねた。

×  
×  
×

「 教えて下さい、あの時ユウと何を話したんですか? 」

泣きじゃくりながら村長に事の顛末を話し、水を一杯胃の奥へ流し込んだ後、やがて私は独り言でも呟くような小さな声で言った。村長は私の前に座って、ただ私の目を見つめていた。こうして見ると、村長の小さな身体が更に小さく見える。

長い、長い沈黙。

そこまで他人に言いたくない事なんだろうか。そう思ったその時、村長が口を開いた。

「ユウは……肺を病んでおった。医者ではもうどうしようもない程に、な……」

「そんな……っ!? 私は何も聞いて」

「それはそうじゃ。その事はあのリル力でさえも知らん。知っておるのはワシと医者くらいなものじゃ。あの時も、その病気の事で相談されてのう……」

その事実は衝撃的だったけど、火山でのあの一件は、それを裏付ける形となった。

あの時、ユウだけ吐血したのも、私を生かそうとしたのも全部……全部、そのせいだったんだ。

悔しい。あの子の事は全部かかっていると思っていたのに、知らない事があつたなんて……悔しい。一瞬、『何で教えてくれなかったの』とあの子に対して怒りが込み上がったけど、最後までそれに気付けなかった私が愚かだったという事に気付き、ただ、唇を噛んだ。

「もう、半年も持たないと医者からは宣告されていたのじゃ。おぬしをこうして生かす事が出来て、あやつはあやつなりに満足じゃろうて……」

「だからと言って……一人残された私はどうすればいいんですかっ！　ユウもいない、リル力もない！！　こんな私だけが、生き残っても……二人がいなきゃ、私は………っ！！」

「落ち着くのじゃ、興奮するとまた倒れるぞ……？　毒は治療したとは言え、体力はまだ戻っておらん」

村長の言う通り、私がここで何かを訴えても何も変わらない。答えのない答えをただ欲しがっても、それは意味がない事は明白だった。

「とにかく、今はゆっくり休む事じゃ。回復次第、もしかしたらとある樹海へ向かってもらう事になるかも知れんからな」

「どついつ事ですか……？」

「今、“迅竜”……“ナルガクルガ”と呼ばれるモンスターがその樹海に出現しての……この村からもハンターを派遣したのじゃが、その異常なまでの奴の速さを前に成す術もなかったそうじゃ」

“迅竜”、“ナルガクルガ”……どちらも聞き覚えのない単語だった。でも、私はもう狩りが出来るとは思えなかった。身体が完治したところで、心が折れたままじゃ行つたところで死ぬだけだ。その折れた心はきつと……ユウとリルカにしか、治せない。二人の事を吹っ切つてまで、これからの人生を歩みたいとは思えなかった。ふと思つた。でも、この村のハンターって……誰が行つたの？

「誰が、そのモンスターを狩りに行つたんですか……？ その人達が駄目だったとしても、この村にはジンと“彼”が……」

突然、村長は黙り込んで下を向き、やがて首を横へと振つた。

「ジンは……死におつた」

「え……っ！？」

「つい先程の情報じゃ。“あやつ”も怪我を負つて、軽傷だったのはたつた一人だけじゃつた……」

「そんな……っ！」

ジンが、死んだ？ あのジンが？ この村で最強とも言われている大剣使いのパートナーだった、彼が……？

「ここより自分の家の方がゆつくりと休めるじやろつ。……家まで送ろつ。そして早く休むが良い」

「いえ……一人で大丈夫です。あの、最後にいいですか……？」

村長がもう一度、私の目を覗き込んだ。

「どうやって私は、あの状況から助け出されたんですか？」

目を覚ましてから、ずっと気になっていた事だった。ラテイオ火山へ行った私達が帰って来なかったから搜索していたのでは私の体力は持たなかっただろう。火山の熱にやられ、力尽きていた筈だった。なのに私は今、こうして生きている。それが不思議で仕方なかった。

「偶然　いや、奇跡とも呼べるかも知れぬ。おぬし達が発った翌朝、別の一人のハンターがラテイオ火山に眠る鉱石を探しに発っておったのだ。そして“彼女”が倒れているおぬしを発見し、村まで運んだ訳じゃ。発見された時、おぬしは虫の息だったそうじゃが……今こうしていられるのは、まさに奇跡に等しいじゃろう」

「……」

「おぬしが生きているのは、天命じゃ。まだ生きて、成すべき事があるのじゃろう」

……奇跡、天命……か。それでも一人で生き残れって、残酷だよ……神様って……。

私はゆっくりと立ち上がると、『帰ります』と一言だけ呟いて、村長の家を後にしようとした。

「忘れておった」

村長に背を向けたところで、背後から村長の声がした。振り返るとそこには、一通の封筒を私に向かって差し出している、村長の姿があった。それに書かれた文字は見慣れた文字で、『ゼーラ姉へ』と書かれていた。



「あやつから預かっておいた物じゃ。『僕が死んだら渡してくれ』と、あの時に……じゃ。その時はまだ早いじゃろうと思っておったのじゃが……まさかこんなに早く渡す日が来るとはお」

ユウが私に、手紙を……？

私はそれを受け取ると、今度こそ、村長の家を後にした。

×  
×  
×

家に帰るなり、私は着の身着のままベッドへと倒れこんだ。改めて部屋を見渡すと、いつも三人で食事していたテーブルや、いつもユウが食事を作ってくれていたキッチンが見える。ふと、テーブルを囲んで三人で賑やかに食事をしている姿や、調理をしているユウの姿が見えたけど、瞬きを一つする間に消えてしまった。……もう、あの楽しかった日は、戻って来ない。また、目に映る景色が滲んだ。

アイテムボックスの上には、私が着ていたくフルフルDシリーズ>とくスパルタカスファイア>が置いてある。村長が誰かに言っ、私の家まで運んでくれていたんだろう。他にもユウが着ていたくザミシリーズ>やくブレイズブレイド>があった。だけど……リルカの物はくデスパライズ>しかなかった。あの子達は両親がいないから、ずっと一緒だった私の家に持って来てくれたんだろう。

「……………また、いつか使う時が来るのかなあ」

ぼつりと呟く。今の私は、もうハンターを続けるつもりなんてこれっぽっちもない。可能ならさっさと処分して、ハンターだった事も忘れたいくらいだった。でもそれは、ユウとリルカと過ごした思い出の品物だから……多分、私はずっとそれを処分せず、ハンターも続けるんだろう。……………二人を忘れない為、そしていつか、あの子達の元へ行く為に。

私は天井を眺めながら、村長から預かったユウからの手紙を取り出した。白い封筒に、お世辞にも綺麗な字とは言えない『ゼーラ姉へ』の文字。どんな思いでコレを書いたんだろう、どんな事が書かれているんだろう。私の指は自然に、その封筒を開け始めている。やがて綺麗に折り畳まれた一枚の手紙が出てくると、私は封筒から手を離し、両手でそれを掴む。封筒は重力に引かれるまま、ひらひらと私のお腹の上へ落ちた。

ゆっくり、ゆっくりとそれを開くと、真っ白い紙の中央に、短い文章が数十行だけ書かれていた。だから時間を掛けて読むつもりが、あっという間に読めてしまった。

『前略　ゼーラ姉へ

この手紙をあなたが読む頃には、僕はこの世にはいないでしょう。どうか、泣かないで下さい。どうか、これからもリルカと笑っていて下さい。

伝えたかった事、教えてもらいたかった事……沢山、あります。きつとあなたも僕に対して、そんな事があつたと思います。

本当にごめんなさい。先に逝ってしまう僕を、許してくれとは言いません。

だけど、僕はずっとあなたに生きて、笑っていて欲しい。リルカと一緒に、これからも人生を歩んで行って欲しい。これからも、リルカを支えてあげて欲しい。

お願い事ばかりで、ごめんなさい。

最後に、僕があなたに伝えたかった事を書きます。ずっとずっと、伝えたかった事を。

だき締めたいくらいに、素敵だったよ。

いつも僕達を見守ってくれて、支えてくれてありがとうね。

すぎてしまった時間はもう元には戻らないから、

きのうの時間を忘れずに、未来に向かって前向きにね。

だめだなんて、絶対に諦めちゃ駄目だからね。

よの中がいつか、誰もが平和に暮らす事が出来るように、頑張つて！

文章で言いたい事を書くのは難しいので、この辺で書くのを止めます。

これからもずっとずっと、笑顔でいて下さい。

あなたの笑顔が、大好きだから」

……涙がまた、頬を伝っていった。

「……何よコレ、文の構成が滅茶苦茶じゃない……っ！ 人に渡す物だったら、下書きしてちゃんと書きなさいよお……っ！」

呆れて、笑ってしまふ。

嬉しくて、悲しくて、涙が零れる。

笑いながら、私は泣いていた。

「そんな事くらい、ちゃんと自分の口から言いなさいよお……っ！」

私はベッドの上から立ち上がると、アイテムボックスのところまで歩き、そしてくスパルタカスファイア>を手を取った。……私がずっと大事にしてきた武器。ずっと私を、ユウを、リル力を守ってきてくれた武器。

その武器に、口の中で小さく『ごめんね』と呟くと、それを手に取ったままアイテムボックスに腰掛けた。

伝えたい。

『私も大好きだった』って伝えたい。

『愛してた』って、伝えたい！

もしかしたら私の思考回路はどこかでショートしてしまっ  
て、おかしくなってるのかもしれない。

だから私は不思議と、自分の今やろうとしている事に疑問さ  
え持たなかった。

<スパルタカスファイア>の銃口を自分の胸に押し付け、手  
を精一杯伸ばすと何とか指がトリガーに触れる事が出来た。  
口の中でもう一度、『ごめんね』って呟く。それはきつと、誰に宛てられた言  
葉じゃなく、そして全てに宛てられた言葉なんだろう。無意識に呟  
いた言葉、それを聞いてくれたのは…この家だけだった。この村に  
来て10年間、ずっと私を支えてくれたこの家 ……。

もう一度だけ呟く。

『ごめんね』って。

私はゆっくりと目を閉じ、そして手を更に伸ばしてトリガーに  
触れる指に力を入れる。

私は今

。

そして

。

トリガーを

.....。

FIN

『トライアングラー』



## 最終話 「ラスト・キス」(後書き)

彼女はトリガーを引いたのか、それとも踏み止まったのか……ご想像にお任せ、なんて事は言いません。

次回執筆予定、「戦う者達 樹海に潜む死神」にて全てが明らかになる……と思います。

しかしこちらは物語の半分にも満たない状態で更新停止中です。ゆっくりと時間を掛けて書き上げて行きたいと思っています。

ところで、この最終話には隠しメッセージを含ませています。と言っても大したモノではなく、よくある手法ですが。「ユウの手紙」にご注目下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7286m/>

---

トライアングラー from モンスターハンター

2010年10月11日23時30分発行